

外国人児童生徒等と共に学び合う

～安心して生活できる場づくりと、母国に自信を持てる活動を取り入れて～

Point：他の教師、保護者と連携する中で学校としての支援体制を整え、外国人児童生徒等の母国の文化を学ぶ機会を設けながら、偏見をなくしていく。

1 取組のねらい

本校では、タイやフィリピン、ブラジルなどからの転入生が増える傾向にある。中には、日本に来ることが初めてで、まったく日本語が分からない児童もいる。そのようなことから、学級の子どもたちに対し、なかなか気持ちを開けずいたり、学習意欲も高まらないといった状況も見られたりすることがある。また、多くの子どもたちが外国の文化を知らないために、外国人児童生徒等に対して偏見を持ったり、いじめの対象としたりすることも心配された。

そのような外国人児童生徒等に対して、子どもたちとの関わりを増やし、自信を持って日本での生活ができるようにするために、外国人児童生徒等から子どもたちが学ぶ機会をつくるようにした。

2 取組の内容

(1) 複数の教師で支援できる体制や家庭との連携

本校の日本語指導学級には、ポルトガル語を話せる教員に加え、新たに市の加配として支援教員が一人つくようになった。学級では担任が身振り手振りを交えながら伝えているが、外国人児童生徒以外の子どもたちへの指導もあるため、手が回りきらない部分があるのが実情であった。外国人児童生徒は、転入して間もない頃には特に厚い支援が必要となってくるため、いろいろな立場の支援教員（学習習慣形成支援・自律補助支援）にも教室に入ってコミュニケーションの補助をしてもらったことも、大きな助けとなった。特に日本語指導教室では、普段教室では見せない姿を見せたり担任に伝えられない思いを日本語指導教員に話したりすることもある。現在は、日本語指導教員と連絡ノートを用いながら様子を伝えあっている。このような職員間の連携による子ども理解が重要になってくるだろう。

また、学校からの連絡がなかなか保護者に届いていなかったり、内容が理解されていなかったりすることがままある。それは、外国人児童生徒等にとってそれらの情報の内容や重要性が理解できていないためであったり、保護者自身も学校のお便りの意味が十分に理解できていないためであったりする。そのために、お便りの漢字にすべてふりがなを振って手渡している教師もいる。また、電話連絡のみならず、家庭訪問を繰り返しながら、学校での様子を伝えたり、逆に学校で困った事柄はないかといったことを聴いたりしながら連絡・連携をしっかりととっていくことが大切である。

(2) 外国人への偏見に対してアンテナを高くしていく

ある時、学級の男子が廊下に整列をさせようと呼びかけたところ、並ばずに遊んでいた外国人児童（Aさん）に文句をつぶやいた。そして、最後に「外国人のくせに」そんな言葉が口をついてしまった。外国から来てまだ日が浅いAさんには、すべきことが全く理解できなかっただろうことを確認した。また、「外国人のくせに」という中に、相手をバカにした気持ちはなかったのか、生まれた国の違いで見下したように聞こえる言い方はよくないことなどを話した。また、その子の家庭にも状況を説明し、共に言葉の重さについて考えていただいた。

ともすると、外国人に対して偏見を持って接してしまう傾向は、子どもたちばかりでなく保護者の中にも存在することがある。そのような場面をアンテナ高く把握し、間違った考え方であることを諭していくことが必要である。そのためには、相手の国の文化や素晴らしさを理解させていくことが大切となる。

(3) 外国人児童の母国の文化を学ぶ機会を設ける

日本語もタイ語も話せるAさんのお母さんに学校に来ていただき、Aさんの「知られざる姿」を話してもらったり、知っている日常生活がスムーズにいくと思われるいくつかのタイ語を教えてもらったりする機会をつくった。もちろん、Aさんもタイ語の先生として笑顔でみんなに教えてくれた。

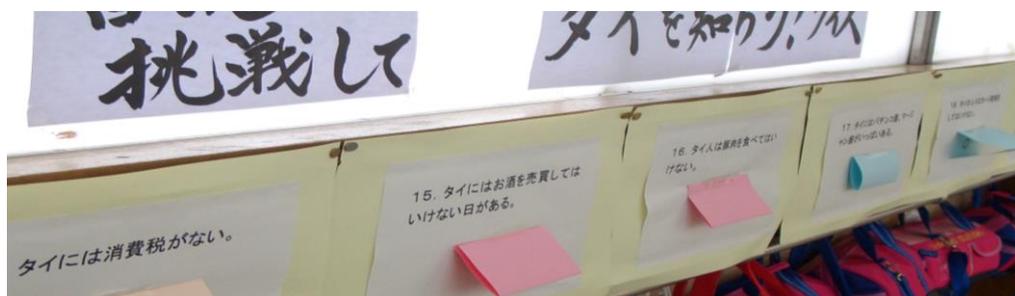
- ・ タイ語を教えてもらって、おはようとこんにちはが同じ言葉だったからびっくりした。最後に女の子が「カー」男の子が「クラブ」というのが不思議だった。
- ・ Aさんのお母さんは日本語も知っているし、タイ語も知っているしすごいなあと思った。
- ・ Aさんのいろいろなことがわかってよかった。どうして水泳がうまいとか、タイでは男の人はみんなお坊さんになることとか、初めて知ることばかりだった。



タイ語と日本語訳は教室の壁に掲示され、いつでも目にしやすいようにした。「サワディー！（こんにちは）」「カープーン（ありがとう）」子どもたちは普段の生活の中でもAさんに対して、また、友達同士でタイ語を使う姿も見られるようになった。

また、しばらくしてAさんのお母さんをお招きしてのタイ教室第2弾「グリーンカレー作り」を行った。子どもたちは、まさに本場の味に舌鼓を打った。カレーづくりの合間には子どもたちから

「タイと日本の違いは？」「日本に来て困ったことは？」「タイではどんな家に住んでいるの？」など質問がされていた。さらに、後日の親子レクリエーションでは、保護者もグリーンカレーづくりをし、親子共々交流を深めていく機会へと発展していった。



廊下に掲示された「タイクイズ」

3 取組についての評価等

「タイにはそんなものがあるんだね」「日本の味と違うけどおいしいな」「そこは日本と同じだね」…。学級の子どもたちがタイの文化に興味を示し、Aさんは自分の国に対して誇りを持てるようになっていった。また、Aさんの得意な運動の場면을大事に位置づけ、友に認められていく場面をつくっていったことも、自信につながっていったと思われる。

そして、クラスの子どもたちも、言葉が通じないことで逆にAさんは今何に困り、どんなことをして欲しいと感じているのかを察していく姿も見られるようになっていった。教師はそのような子どもたちの気持や態度を認めながら、分かり合おうとする心や姿勢が大切であることを確認していった。

（『集まってひとつの花 生徒指導・人権教育取組事例集～いじめのない集団づくりのために～』（長野県教育委員会）より）